

要約すると次の如くである。

新潟 古志以北は Bad Day の出現率が大きい、局地的には Good Day の出現率も大きい。即ち夏の三島沿岸部は70%以上も Good Day である。

高田 中越地方は Bad Day の出現率が大きいのに反し、下越地方は Good Day の出現率が大きい。即ち夏秋の新潟周辺 15K 以内、三島沿岸部は 70% 以上、Good Day である。

十日町 内陸に入る程 Bad Day の出現率が大きく、中越地方はこの傾向が大きい、上下越平場は Good Day の出現率が大きい。

長岡 山間部は Bay Day の出現率が大きい、平場一帯は Good Day の出現率が大きい。即ち頸城平場、下越平場は85%以上 Good Day である。

2階級以上違う日については、十日町は春の頸城高冷地は50%、夏の三島沿岸部は49%以上 Good Day であり、長岡は冬の高田周辺15K 以内は45%、春の新潟周辺10K 以内52%、頸城高冷地は57%以上、夏の三島沿岸部は48%、新潟周辺は41%、秋の中頸は42%、新潟周辺10K 以内は52%以上も Good Day である。

13 むすび

筆者は月別・旬別日照時間の標準偏差、変化率、持続

性、ちらばりの範囲、出現頻度、定性的、定量的見地からみた地域差、代表性、日別日照時間の出現頻度、異常日照時間の月別、旬別出現頻度および継続日数、定量的、分類別にみた出現率、地域差等について、従来の日照時間の累年平均値だけからではうかがうことが出来ない。日照時間からみた気候について充分とはいえないが解析した結果を述べてきたが、本論が諸産業の計画ならびに局地予報の一助となれば幸甚の至りである。尚本論に用いた期間の資料により、毎日の日照時間の地理分布を求めてみたら季節によって天気の限界線のはっきりした数種の型に分類することが出来、気候学的にも興味あるが、動気候学的な解析は稿を改めて報告したいと思う。

終りに当って、本論の解析には終始ご指導を戴いた新潟地方気象台長中田良雄博士並びにご鞭撻を戴いた今里能参事官、産業気象課長大後美保博士、東京航空気象台久米庸孝次長に満腔より深謝しますと共に、種々討論して戴いた長友気象大学校長尾隆博士、統計課荒井隆夫調査官および測候課大道寺重雄補佐官に衷心より厚くお礼申し上げます。また資料を貸与して下さいました管内高田測候所に感謝の意を表する。

〔書評〕

天気予報—日本の空の診断書

根本順吉著：日経新書，(1965) 245頁，240円。

本書はそのまえがきにあるように、天気予報を利用する人達のために書かれたものである。しかし、本職の予報官も一読する価値があろう。著者は人も知る如く気象学史の専門家であり、長い経験を積んだ現場の予報官であり、また文筆家でもある。本書にはこれらの特徴がよく現われており、読みやすく、しかも天気予報の発展、現在の天気予報のポイントがよく描かれているからである。

内容は3部にわかれ、序章では天気予報の歴史、第1部では天気予報の診断と題して日本の天気変化が季節別に述べられ、第2部では天気予報と題し、天気予報の技術が書かれている。また、春一番、オリンピックの開催国の天気、ぜんそくと天気というようなジャーナリスティック

な節もあれば、気象学の本質にふれる現象の大きさ、数値予報、天気予報の成績などの節もある。

紹介者はこれを読み、一般の大衆を対象とした天気予報の本としてはこれより良いものを書くことは一寸出来そうもないと感心したが、それと同時に、これとは全く違った立場からの天気予報という本を書いてみたいという気分がむらむらと起きてきた。それは本書は天気予報の過去から現在までの姿を歴史的に描写しているが、これとは反対に、未来の天気予報を夢みた、歴史抜きのドライな立場からの描写もありそうだからである。しかし、これはあくまでも気分であって、いまのところ本当に手をつけるひまはなさそうである。

高橋浩一郎

「天気」12. 3.